

話しことばの調査

著者	国立国語研究所
発行年月日	1974-04
シリーズ	国立国語研究所の歩み ; 10
URL	http://doi.org/10.15084/00001578

話しことばの調査

国立国語研究所

昭和49年4月

話し言葉の調査

I 話し言葉研究の進展

1 話し言葉研究の難点

研究所創立当時、話し言葉の研究は、まだ十分に進んでいたとは言えない。

もちろん、話し言葉の研究そのものは古くからあった。異国との通商のために、あるいは異国の文化を輸入するために、異国語を学び、それとの対比で自国語を研究したり、学

んで得た異国の言語文化に刺激されて、自国語についても関心の眼を向けたりした。わが国における古代の日本語(話し言葉)研究——「五十音図」の作成や古辞書のアクセント符に象徴される——はこの種のものが多くといてよいであろう。

また異国人が宗教を弘布するために、あるいは版図を拡大するために、この国の言語(話し言葉)を研究することもあった。室町時代におけるキリシタンにおける日本語研究や江戸時代におけるロシアの日本語研究等は、この種のものではあった。

このような、実用に根ざした話し言葉の研究はあったが、一般には従来の言語研究においては書き言葉(文章語)の研究が主流をな

していたといっても言い過ぎではないであろう。

書き言葉の研究が主流をなして、話し言葉の研究があまり行なわれなかったことについては、それなりの理由があったと思う。

(1)文字は本来、音声の欠点を補うものとして用いられたが、文字に書写された書き言葉は定着性があり、文献として残り、古い時代のものも遠隔の地の書き言葉も研究の対象となる。

(2)次の時代への文化の伝達にはその性質上、書き言葉が有利であり、学問・芸術等に関する文化的価値の高い文献が多い。

(3)したがって、前時代の文化を理解し、それを発展させるためには、文献を読解する必要

があり、当然言語（書き言葉）が研究の対象となる。

(4)書き言葉の性質として、整った表現が多くかつ文献として定着しているから、資料として扱いやすい。

これに対して話し言葉を研究対象とする場合には次のような難点がある。

(1)話し言葉は瞬時に消え去るものである。古い時代の話し言葉は、文学作品における「会話」等を中心に、口語資料によってその様相がうかがえるが、純粹の話し言葉は資料として定着し難い。

(2)その口語資料ですらまとまったものは多くはないし、また、学問・芸術等に関する文化的に価値の高いものは少ない。

(3)話し言葉は瞬時に消え去るので、資料として取り扱にくい。

2 話し言葉研究の意義

話し言葉が研究の対象として注目されるようになったのは比較的新しい。

明治時代にも、国語教育や言文一致運動と関連して、「話し言葉」が問題とされたことはあったし、昭和になってからは「朗読」や戦時中の「日本語の海外進出」の立場から採

り上げられることもあった。また日常言語生活の向上発展のために、あるいは国語の将来のために話し言葉が注目された。特に、柳田国男・東条操・神保格・西尾実等の諸先覚がそれぞれ立場から話し言葉・方言を重要視すべきことを説いたのは特筆せねばならない。

しかし、話し言葉が本格的に研究の対象として多くの人びとに採り上げられるようになったのは戦後である。それは第一に、社会生活の体制が変化し、従来の「上意下達」「沈黙は金」の立場よりも、「話し合い」「民主化」が尊重されるようになり、話し言葉の重要性が認識されるようになったせいである。

第二に、現代語をも重視する二十世紀西洋言語学の影響はすでに戦前にもみられたが、戦後はさらに、アメリカの「話し方教育」重視の影響もあった。

第三に、録音器が普及し、話し言葉の資料の採集が容易になり、研究の便も画期的に増大した（とはいっても文字化に多くの時間を要するので、実際には書き言葉に比較すると、依然として困難さがある）。また、音声分析の機械も飛躍的に開発されてきている。

こうして、「話し聞く生活は、われわれの言葉生活において、それほど普遍的であり、

日常的であり、かつ基礎的な領域である」〔話しことばの諸形態〕『国語教育講座』所収（西尾実）という認識の下に、戦後の話し言葉の研究が行なわれた。あるいはまた、話し言葉の改善、話し言葉と書き言葉の疎隔をなくすためにも「国語学というものの中心点を、書いた古来の文章の方から、活きて日々働いている口言葉の中へ引移して来なければなりません」〔毎日の言葉』自序、柳田国男）ということにもなったのである。

3 調査のあらまし

国立国語研究所は創立以来「話し言葉研究室」を中心に、このいわば未開拓な分野に取り組むことになった。

そこにはまず解決すべき問題があった。一つは「調査法」である。録音機もまだ普及していなかった当時、話し言葉の実態調査をどのような方法で進めるか、分析にたえる資料をどのようにして収集するかはさしあたっての問題であった。また、共通語の話し言葉の対象をどう設定するかも問題である。基盤となっている東京語の性格も不明である。山の手と下町では一体どれほどの違いがあるのであろうか。東京生育者と地方生育者との間

にはどれほどの違いがあるのか、あるいは、職業・学歴等による違いはどうかとも問題になる。

これらの問題について一往の見当をつけるために行なったのが、「東京方言の実態調査」のための第一次・第二次準備調査である。これは、これからの話し言葉研究の「準備調査」であった。

次に話し言葉の構造の特徴を把握し、諸問題の所在を明らかにするための概観調査を行なった。この結果は『談話語の実態』（国立国語研究所報告8）として刊行された。

次に、「語形確定のための基礎調査」がある。話し言葉の中には、ボク・ボク（僕）、イリクチ・イリグチ（入口）、論ジル・論ズル等のように語形が不確定である、いわば、ゆれている語が少なからずあり、今日の言語生活の上でもしばしば問題とされている。このようなゆれている語にはどのようなものがあるか、どのようなゆれの種類があるか、それらに対して人々はどうのような意見をもってゐるか等を明らかにして、標準語制定のための一資料を作ることと目的としたもので、その結果は『国立国語研究所年報7』で報告された。

次に「話しことばの文型」の調査を行なった。現実の話し言葉の文法的事実をとらえるという立場から、文法研究の一環として行なわれたものである。すなわち、話し言葉の構造を解明するためのものであった。その結果は「話しことばの文型(1)」（国立国語研究所報告18）、および「話しことばの文型(2)」（同報告23）として刊行された。

以下、順次、項を改めて紹介することにする。

II 東京方言の実態調査

第一次・第二次準備調査

昭和24年度に二回の調査を行なった。第一次調査は主として被調査者自身が記入した調査結果が信頼できるかどうかを確かめようとしたものである。総理庁（当時）世論調査部の行なった「所得税確定申告書」説明書の理解度の調査の機会を利用し、東京都四谷税務署管内の所得税納付者からのサンプリング調査法により一四七名について調査した。調査項目はアクセント——ラジオ・ラジオ等6、音韻——ムズカシイ・ムツカシイ等6、文法——来れない・来られない等3である。

被調査者自身による記入の結果と面接による結果とを比較すると、そのくいちがいの度合いは次のようになる。この被調査者数は48。

- アクセント（平均）……………一四・六%
- ラジオ・ラジオ……………一〇・四
- クメン・クメン……………一八・八

イトコ・イトコ	一六・七
ボク・ボク	一八・八
デンワ・デンワ	八・三
サカ・サカ	一四・六
音韻(平均)	四・九
ムズカシイ・ムツカシイ	二・一
ジデンシヤ・ジテンシヤ	八・三
センダク・センタク	四・二
イリクチ・イリクチ	八・三
アパート・アパート	二・一
カキドメ・カキドメ	四・二
文法(平均)	二・一
コレナイ・コレレナイ	二・一
タペレナイ・タペレレナイ	〇
タリナイ・タラナイ	四・二

すなわち、アクセントはかなりくいちがいがあり、被調査者自身による記入はあまり信頼できないことがわかった。

また、生育地(小学校時代)が東京であるか地方であるかによってみると、その間にかかなりな違いがみられた。すなわち、地方人は東京人に比較して、ムツカシイ(難かしい)イリクチ(入口)、センダク(洗濯)、アパート、足ラナイ、クメン(上面)、イトコ、デンワ(電話)という人が多い。

また、年齢別にみると、東京人で四〇歳以上のの人にアパートが比較的多くみられる。

第二次調査は、山の手と下町とでどのような違いがみられるかを問題にした。四谷・牛込地区と浅草地区との小学校28校より6年生三〇〇名を抽出し、アクセント・音韻・文法を通じて計26項目について面接調査を行なった。参考として担当教師および各学区の生えぬきの東京人一、二名についても調査した。調査語はアサヒ・アサヒ(朝日)、ヒバチ・シバチ(火鉢)、タラナイ・タリナイ(足りない)等、東京で二つ以上の形があり、ゆれているものを採り上げた。それは、三つのグループに分類することができる。

第一は、従来山の手と下町とで違いがあると考えたものである。これに属する語は、アクセント——アサヒ・アサヒ(朝日)、サカ・サカ(坂)、カミナリ・カミナリ(電)、イネムリ・イネムリ(居眠)、オキヤクサマ・オキヤクサマ(お客様)、

音韻——シチゴサン・ヒチゴサン(七五三)、シバヤ・ヒバヤ(渋谷)、ヒビヤ・シビヤ(日比谷)、ヒバチ・シバチ(火鉢)、ヒト・シト(人)、オヒサマ・オシサマ(お日様)、マッスグ・マツツグ、ヤッパリ・ヤッパシ、

ツメタイ・ツベタイ、サビシイ・サミシイ。第二は、山の手と下町とで違いがあるときされているが、人によって見解の差があるもの。これに属する語は、

文法——足らない・足りない、きやしない・こやしない。

第三は、新たに問題となっているもので、これに属する語は、

アクセント——ボク・ボク(僕)、イトコ・イトコ、

音韻——ハエ・ハイ、

文法——来られる・来れる、食べられる・食べれる、大きな・大きい、小さな・小さい。

その結果をみると、山の手と下町とで大きな差を示すものは極めて少ない。サカ・サカ(坂)、ヒト・シト(人)、オヒサマ・オシサマ(お日様)等は差がかなりはつきり表われたが、そのほかアクセントのカミナリ・カミナリや、音韻のヒトシの問題語を除いてはあまり大きな差は表われない。「きやしない・こやしない」においては、成人では下町に「こやしない」がやや多いが、児童ではむしろ山の手にそれがやや多い。

要するに山の手と下町との差は、少数のものを除いてはあまりみられなかった。

Ⅲ 話し言葉の概観調査

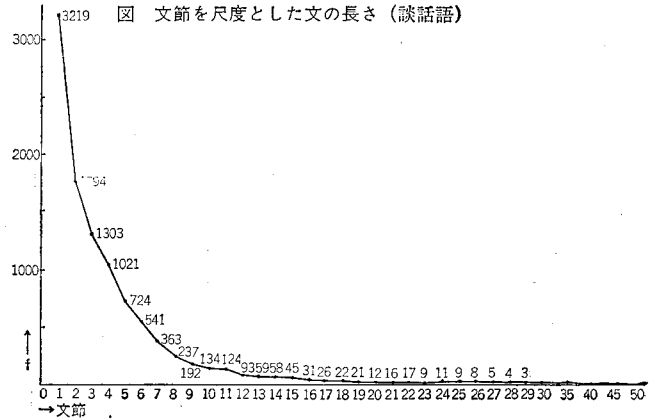
昭和27・28年度にかけて行なわれたこの調査は、具体的な話し言葉の資料により、量的調査を行なったものとして注目されよう。

日常の談話を調査対象とし、種々の場面から録音資料を採集した。分析に用いられたのは三十時間分である。比較資料として、ラジオのニュース・ニュース解説・座談・講演・講演・落語・劇・おとぎ話等の九時間分を採集し分析した。その報告書『談話語の実態』は、イントネーション、語・文節・文の長さ、文の構造、語の種類・使用度数・用法に

談話語の文の長さの分布

1	文節文	31.8%
2	"	17.7
3	"	12.9
4	"	10.1
5	"	7.6
6	"	5.4
7	"	3.6
8	"	2.3
9	"	1.9
10	"	1.3
11	"	以上 6.8

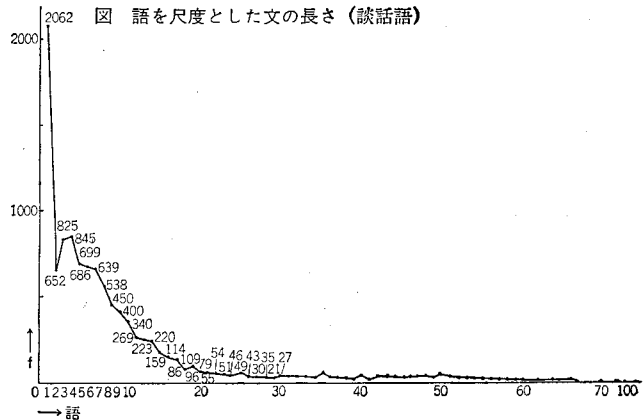
図 文節を尺度とした文の長さ (談話語)



ついでの実態調査の結果を報告したものである。

文の長さは、一文節文が三一・八％で、一文節文・二文節文の合計は四九・五％である。度数分布をみると「し」の字型」を示す。これは書き言葉とは特に異なる特徴である。

図 語を尺度とした文の長さ (談話語)



文節を尺度として談話語の文の長さの分布をみると次のようになる。

比較資料としてのニュース・ニュース解説についてみると、一文節文は、それぞれ、全文の一・九八％、二・〇四％である。四文節以内の文は、ニュース八・五七％、ニュース解

説八・七%で、ほぼ八%強を示すに過ぎない。談話語が七五%を示すと大きな差がある。

文節を尺度として、文の長さの平均をみる
と次のようになる。

談話語	三・八一文節
落語	四・〇四
講談	五・〇四
座談会	五・四九
劇	五・六二
おとぎばなし	八・三四
講義	九・三一
ニュース	一六・四八
ニュース解説	二一・〇二

すなわち、文章語的なニュースやニュース解説に比して、その四分の一にも達しない。

しかし、文節の長さは、談話語二・〇語に
対し、ニュース・ニュース解説はそれぞれ、
一・八語、一・九語であり違いがない。

文の構造を成分の組み合わせという面から
調べる事ができる。述語に対する関係が一
次的であるか、二次的であるかという観点か
らみると、

① 花が 咲く。
② 赤い花が 咲く。

③ 赤い 花が 咲いたので きれいだ。
において、①の「花が」は一次の成分、②の
「赤い」は二次の成分、③の「赤い」は三次
の成分とすることが出来る。そこで①を一次
の関係の文、②を二次の関係の文、③を三次
の関係の文とすることが出来る。「次」の観
点から話し言葉をみると次のようになる。

	1次	2次	3次	4次	5次	6次	7次	8次	9次
女子学生雑談	75.0	16.5	3.6	0.9					
主婦の雑談	74.8	19.2	5.2	0.5		0.2			
男子学生雑談	75.0	20.0	2.6	1.9	0.4				
男子老人談話	71.1	17.8	7.0	3.0	1.0				
ニュース	9.1	14.7	24.7	21.7	11.2	13.3	4.2	0.7	0.7

すなわち、おしな
べて談話語は単純な
構造の文が多い。一
次の文が大部分であ
る。これに比較し
て、ニュースは三次、
四次の文が多く、五
次、六次の文も珍し
くはない。

次に、話し言葉の
文の構造をみると、
主語の現れない文が
多い。これは話し言
葉が場面に大きく影
響を受けていて、か
つ、話し手と聞き手
とが同じ場面にある
からであろう。友人

と絵を見ていて、「すばらしいね」と言えば、
主語は言わなくても意味は通じるであろう。
ニュースと対比すると次のようになる。

談話語 ニュース	総主のあ る文		主語の ある文		主語の現れない 文	
	二・三%	二六・四五七・四	二六・二	六二・九三七・一	一六・三	〇

すなわち、談話語には主語のない文が多く
また、独立語文も多いのである。

文の構造についてみると、文の成分の比率
は、談話語とニュースと新聞とではかなり違
いがある。すなわち、主語・述語・連体修飾
語・連用修飾語・独立語の五成分の比率は次
のようになる。(ただし、新聞は「新聞用語
研究」第25号によったものである)

	主語	述語	連体修	連用修	独立語
談話語	三・〇	二六・〇	七〇	壹・七	一九・三
ニュース	二・二	七・五	二九・二	四三・五	八・八
新聞	三・〇	一五・三	三三・五	六・七	三・五

すなわち、談話語は連体修飾語が少なく、
独立語が多い。

次に文の成分の内部構造は、書き言葉との
間に違いがみられる。たとえば、主語につい
てみると、

	体言だけ	～ハ	～ガ	～モ	他
談話語全体	28.9%	23.7	33.5	6.7	7.3
女子学生雑談	46.3	10.6	31.7	6.5	4.9
主婦の雑談	33.9	22.0	25.2	15.0	3.9
男子学生雑談	28.5	23.1	40.8	3.1	4.6
男子老人談話	8.2	28.2	40.9	11.8	10.9
ニュース	0	70.8	20.8	0	8.3
新聞	9.7	47.4	26.0	2.5	14.4

すなわち、同じ談話語でも、老人の回顧談は他とはかなり違った様相を示す。それにしても、談話語では一般的に格助詞を伴わずに体言だけで主語となっているものが多く、ニュースや新聞では「～ハ」の形が多いということに注目してよいであろう。

話し言葉の文末述部には、文末助詞のついてることが多い。どの程度ついているか、どのような文末助詞がついているかをみると次のようになる。

	文末助詞 体全	ね	よ	か	の	な	わ	て	さ	他	その他助詞			
											自立 語	ます で	だ	その他
談話語全体	73.0	25.0	14.8	6.0	6.5	1.8	3.0	2.0	0.6	13.2	14.8	5.0	1.4	5.9
女子学生雑談	68.8	22.9	16.7	1.3	10.0	0.4	5.0	3.0	0	9.5	28.8	0	0.2	2.2
主婦の雑談	73.3	25.6	10.9	7.3	6.7	0.3	3.9	4.1	0	14.5	13.0	3.1	1.8	8.8
男子学生雑談	75.8	18.6	23.7	4.4	1.4	7.3	0	1.0	2.6	15.0	13.3	0.3	3.8	6.8
男子老人談話	66.0	36.2	3.2	17.5	1.6	0.3	0.3	0.3	0	6.5	15.2	9.1	1.0	8.7
ニュース	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18.3	22.4	0	59.4

話し言葉の文末述部

話し言葉の文は、その七三％が文末助詞を伴っている。どのような文末助詞を用いるかは話者によっても異なるが、また、場面や相手によっても異なるが、一般には、「ね」「よ」「か」等が多い。「男子学生」には「よ」「か」「な」が比較的に「の」が多く用いられている。男子老人の回顧談には「か」が比較的に多いが、これは個人的な「くせ」に属するようである。

品詞の使用率をみると次のようになる。

これを従来の新聞文章の調査の結果と対比してみると、次のような特徴がある。

- (1) 名詞が少ない。
 - (2) 名詞と動詞との比較において、動詞がかなり多い。
 - (3) 動詞と形容詞との比較において、形容詞が多い。
 - (4) 副詞が多い。
 - (5) 感動詞が多い。
 - (6) 融合形が多い。
- また、コソアド語が多く、代名詞の七〇％、形容動詞の二〇％、副詞の二九％、連体詞の九二％はコソアド語である。
- また、話し言葉は接続詞が比較的に多い

品詞の使用率

	体言	動詞	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	接続詞	感動詞	助詞	助動詞	融合形
談話語	20.5	12.2	2.7	1.2	6.1	0.8	1.9	4.7	34.7	12.9	2.3
女子学生雑談	20.7	10.3	3.2	1.5	6.3	0.5	2.9	6.0	37.7	9.0	2.0
主婦の雑談	19.6	13.1	2.8	1.1	6.0	1.2	2.5	5.6	34.5	11.1	2.5
男子学生雑談	21.2	12.2	3.9	1.4	5.9	0.8	1.6	1.5	36.9	12.4	2.4
男子老人談話	21.5	11.6	1.9	1.1	7.4	0.7	1.3	4.5	35.1	13.2	1.7
ニュース	36.4	14.9	0.4	0.9	1.3	1.6	1.0	0	33.0	10.6	0
ニュース解説	28.5	16.0	0.9	1.5	2.5	1.2	2.6	0.3	34.3	12.3	0.03

が、それはほとんど無意味に、単なる「場つなぎ」に用いられていることがある。たとえ

ば

- 全部デ ドノクライ?
- ソレデ コノ 付属 一切ヲ ツケマシテ 三十二円。

このような類は接続詞の全使用度数の約一割を数える。比較的に話頭に多くみられる。「で」「だから」「でも」「それで」「だけど」「だって」等にはこのような用法が用い。

談話語によく用いられる接続詞を順にあげると次のようになる。

- ソレデ、ダカラ、デ、ソレカラ、デモ、
- ジャア、ダケド、デスカラ、ダッテ、
- ソウシテ、ソウスルト、ソウシタラ、
- シカシ、ソレジャ、トコロガ、

また、よく用いられる副詞を順にあげると次のようになる。

- ソウ、マア、モウ(感歎)、ヤッパリ、モウ、コウ、ドウ、チョット、ゼンゼン、マダ、ヤハリ、スコシ、ヒジョウニ、スグ、ドウゾ、イチバン、ドウモ、タイヘン、アア、マタ。

話し言葉には融合形の多いことも特徴である。

テイル——テル、デイル——デル、テオク——トク、テンマウ——チャウ

(テ・デ+補助用言の類)

デワ——ジャ、勝チワ——カチャ、今度ワ

——コンダア (諸種の語+ワの類)

スレバ——スリヤア、ナケレバ——ナケリヤア (諸種の語+バの類)

の三つの類が大部分である。

IV 語形確定のための 調査

昭和29年度から30年度にかけて行なった「語形確定のための基礎調査」は、ゆれている語形について調査を行ない、標準語制定のための一資料を作ることを目的としたものである。すなわち、

- (1) ゆれている語にどのようなものがあるか。
- (2) どのようなゆれの種類があるか。
- (3) それらに対して人々はどうのような意見を持っているか。

を解明しようとした。

ゆれている語はかなり多い。それらを採集・整理することはもちろん大事な事である。同時に、その中からどちらかを標準語として選ぶとすれば、どのような基準に基づくべきであるか、その基準を考えなければならぬ。たとえば、ヨイ・イイ(良い)、ハイ・ハユ(颯)、タトイ・タトエ(副詞)等は、

どちらの語形が望ましいのであろうか。それはどのような理由によるのか。

実際には、現実によらざるがどのように使用されているか、その実態調査をしなければならぬであろう。十分に行届いた実態調査の上に立って論議は行なわれるべきである。

しかし、それにしても、従来これらの問題語についての人々の意見はまちまちである。

伝統を尊重するか・新しい傾向を尊重するか、東京山の手を重視するか・全国の一般的な使用を重視するか、等々さまざまである。

一体、ある語形を、より望ましいとする理由は、ゆれの種類に応じてどの程度違いがあるのか、理由として用いられるものにはどれだけの種類があるのか等は、やはり承知しておきたい事である。

ゆれている語

昭和29年度アクセント、音声・音韻、文法にわたってゆれている語を諸種の文献から採集し、整理して、リストを作成した。

アクセントは諸文献から一、四七二例を採集したが、『日本語アクセント辞典』『明解國語辞典』にもゆれが記載されているので、それらからも採集した。比較的多くの人から問

題にされているものは次のような語である。アクセントの型を0・1・2……の方式で示せば、

0・1

ス(単)、ヨ(世)、ボク(僕)、デンワ(電話)、トモニ(共に)、ヒバチ(火鉢)、オンガク(音楽)

0・2

ニジ(虹)、ソソグ(注ぐ)、タマゴ(卵)

1・2

カミ(神)、サカ(坂)、ハハ(母)、アサヒ

(朝日)、トマト

1・3

ネッシン(熱心)、アカトンボ(赤蜻蛉)

3・4

アシオト(足音)、アシモト(足元)、カミナリ(雷)、ソノトキ(其の時)、モノサシ(物差)、ヨロコビ(喜び)、カンガエル(考える)

4・5

オホシサマ(お星様)、タカラモノ(宝物)、

ヒトリゴト(独語)

5・6

テンジンサマ(天神様)

音声に関しては諸文献から延べ二、二四八

例を採集した。その内訳は次のとおり。

A 音節の相違

a 直音と拗音 六三件 延べ一二五

例、サカン・シヤカン（左音）、ゲシク・ゲシユク（下宿）

b 促音と他の音節 三七件 延べ五五

例、アタタカイ・アッタカイ、アマツサエ・アマツサエ

c 撥音と他の音節 四七件 延べ七九

例、オカエリナサイ・オカエンナサイ、イロイロナ・イロンナ

d 母音の相違によるもの

●二重母音と長母音 七六件 延べ一〇四

例、ケイサツ・ケエサツ、オモウ・オモオ（思）

●有声と無声 六九件 延べ七七

例、キシヤ・キシヤ（汽車）、クフウ・クフウ（工夫）

●一母音相互 一二三件 延べ一七五

例、ハイ・ハエ、アソコ・アスコ

e 子音の相違によるもの

●清音と濁音 二〇三件 延べ二七二

例、カカト・カガト、ムツカシイ・ムズカシイ

●単なる破裂音 一一件 延べ一三三

例、バイオリン・ヴァイオリン、ヤブル・ヤブク

●単なる鼻音 五件 延べ六

例、カグ・カム

●単なる摩擦音 四八件 延べ七五

例、ケハイ・ケワイ、プラットホオム・プラットフォオム

●単なる破裂音 二件 延べ三

例、スケデユウル・スケジュウル

●破裂音と鼻音 四七件 延べ五八

例、コオトオガツコオ・コオトオガツコオ、サビシイ・サミシイ

●破裂音と摩擦音 四三件 延べ八七

例、ナデル・ナゼル、カラツキリ、カラツキシ

●破裂音と破裂音 一五件 延べ一六

例、ティイム・チイム、ビルディング・ビルジング

●摩擦音と破裂音 一〇件 延べ一五

例、マツスグ・マツツグ、シソ・チソ（紫蘇）

f 子音の有無によるもの 九五件 延べ一四一

例、ホオ・ホホ（頬）、ウデル・ユデル

g その他 二二件 延べ四二

例、カイイ・カユイ、イイ・ヨイ

h 一音節と二音節 八件 延べ二一

例、フィルム・フィールム、フェルト・フェルト

B 音節の有無

a 促音 六一件 延べ九八

例、ヨッポド・ヨホド、アツクッテ・アツクテ

b 撥音 二六件 延べ四四

例、アンマリ・アマリ、オンナジ・オナジ

c 短母音と長母音 八二件 延べ九八

例、イッシヨケンメエ・イッシヨオケンメエ、セ・セエ（背）

d その他 九七件 延べ一二九

例、カソオプシ・カソプシ、ダイドコロ・ダイドコ

C 音節の転換

a 母音の転換によるもの 一件 延べ一

例、カツキリ・キツカリ

b 子音の転換によるもの 二〇件 延べ三二

例、ハラツツミ・ハラツツミ、アトシザリ・アトシザリ

c その他 三件 延べ五

例、ダランナイ、シダラナイ

D 音よみ・訓よみなどによる相違 二九〇

件 延べ三四九

例、コオラン・カクラン（攪乱）、ライサン・レイサン（礼讃）

E 二語以上のつながりと融合形 五七件
延べ一三七

例、テワ・チャア、テイル・テル

計 一五六一件 延べ二二四八

文法に関しては諸文献より、延べ一、〇四一例を採集した。その内訳は次のとおり。

A 動詞の活用

● 五段・上一、一六件 四一例

例、飽く・飽きる、減ぶ・減びる

● 五段・下一、二五件 四二例

例、任す・任せる、廃る・廃れる

● サ変・五段・一九件 二六例

例、訳する・訳す、なくする・なくす

● サ変・上一、三七件 八六例

例、感心する・感心しる。甘んずる・甘んじる。

● その他 三件 六例

例、伝う・伝わる、うる・える

B 動詞の活用形

● 音便形 一四件 一八例

例、歩いて・歩いて、沿うて・沿うて

● 命令形 四件 五例

例、起きろ・起きよ、くれ・くれろ

● 未然形 三件 五例

例、こよう・きよう、こられる・きられる

● その他 八件 一五例

例、起きまい・起きるまい、こやしない・きやしない

C 類似的動詞

● 類似語 一二件 二六例

例、～ている・～てある、へす・へらす

● 複合語 一〇件 一〇例

例、よろこび迎える・よろこんで迎える

D 形容詞・形容動詞の活用 一三件 三二例

例、暖かい・暖かな、大きい・大きな

E 形容詞・形容動詞の活用形

● 連体形 二一件 二二例

例、大粒な・大粒の、正式な・正式の

● 終止形——連体形 三件 三例

例、きれいだこと・きれいなこと

● その他 九件 九例

例、無理ならぬ・無理からぬ

F 類似的形容詞・形容動詞 七件 七例

例、よい・いい、～てほしい・～てもらいたい

G 類似的名詞 七件 一一例

例、多目・多い目、おさらい・おさらえ

H 副詞の照応 一七件 二三例

例、絶対（行く）・絶対（行かない）

I 類似的副詞 三三件 三三例

例、割りと・割りに、泣く泣く・泣き泣き

J 助動詞

● 使役 一七件 二四例

例、泣かす・泣かせる、降りさす・降りさせる

● 受身 一一件 一一例

例、～させられる・～させられる、飾られてある・飾ってある

● 打消 三四件 四三例

例、～なければならぬ・～ねばならぬ

● 可能 一六件 二八例

例、書かれる・書ける、起きられる・起きられる

● 意志・推量 九件 一〇例

例、晴れましよう・晴れるだろう、しよう・しよう

● 断定 二〇件 二二例

例、面白いです・面白いのです、～ません・～ませんです

● その他（活用形） 一四件 二三例

例、くませ・まし

●その他 一〇件 一〇例

例、飲みたいようだ・飲みたいみたい、曲った道・曲っている道

K 助詞の連結 六四件 六六例

例、どこへか・どこかへ、どこやらへ・どこへやら

L 助詞の交替

●格助詞 八三件 一〇七例

例、水が飲みたい・水を飲みたい、雨が降る日・雨の降る日

●副助詞 四件 四例

例、活動へなんか・活動へなど

●係助詞 六件 六例

例、だれとでも・だれとだって・だれとなりと

●接続助詞 二四件 二四例

例、見がてら・見ながら、優勝したので・優勝したから

●その他 一三件 一三例

例、誰も・誰もが、行くなら・行くならば

M 敬語

●接頭語・接尾語 三六件 四四例

例、おかあさん・おかあさま、おコーヒー・コーヒー

●特別の語(体言) 三件 一三例

例、わたくし・わたし・あたくし・あたし

●特別の語(その他) 二〇件 二五例

例、おっしゃる・申し上げる、召上る・お食へになる

●動詞・助動詞 六六件 七二例

例、お使いになる・お使いなさる・使われる

●位置 九件 九例

例、いらっしゃっています・来ていらっしゃいます

●重複 七件 七例

例、お帰りになる・お帰りになられる

●その他 四件 四例

例、いらっしゃいましたか・いらっしゃいますか

N その他

●照応 三件 三例

例、どれほどわかったのかどうだったかは

●文語的表現 三〇件 三三例

例、御出席あらんことを希望します

●その他 二一件 二二例

例、くさせていたたく、くですけれど

計 七八五件 一〇四一例

これらの資料の詳細なリストは、採集されたカードとともに部内資料として使用され、公表はされなかった。

選択の理由

ゆれている語のどちらかを望ましいとする場合の理由は何であるか。人々は具体的に問題語について、どういう理由により判断しているのか。それらを諸文献により採集したほか、小規模調査により補充し、さらに検討を加えて三十項に整理した。

こうして、昭和30年度に国語研究者・有識者に前後二回のアンケート調査を行なった(第一回五十名、第二回三百名)。一つには問題語に即して採る理由、採らない理由を具体的にどのように適用しているかを知ろうとしたのであり、また一つには、一般的に標準語として採否を決める基準についての人々の意見を明らかにしようとしたのである。(ただし後者については第二回調査のみ)

三十項目において、選ばれた理由を百分比で示すと次のようになる。

- 1 一般的・特殊的 八六・八%
- 2 増加の傾向・減少の傾向 四七・七%
- 3 新鮮・古くさい 一〇・九%

- 4 伝統的・新奇 三七・九
 5 本来の形・くずれ 五七・五
 6 共通語的・地方語的 七九・九
 7 山手的・下町の 一六・一
 8 関東的・関西的 一四・四
 9 使用地域が広い・狭い 六三・八
 10 口頭語的・文章語的 五〇・〇
 11 口語的・文語的 四二・〇
 12 日本語的・外国語的 三九・七
 13 日本語調 翻訳調 三五・一
 14 中流以上・下流 一〇・九
 15 教養層・非教養層 三六・二
 16 ある種の人だけ 二〇・一
 17 規範に合う・合わない 四〇・二
 18 望ましい体系を作る・作らない 六〇・三
 19 変化の傾向にそう・さからう 四六・六
 20 論理的・非論理的 三八・五
 21 語感がよい・悪い 七七・六
 22 丁寧・丁寧すぎる・ぞんざい 二四・一
 23 よい表現・悪い表現 三三・九
 24 おぼえやすい・おぼえにくい 二八・七
- 25 言いやすい・言いにくい 六九・〇
 26 聞きわけやすい・聞きわけにくい 七四・七
 27 簡潔だ・簡潔でない 二八・七
 28 意味を区別する・区別しない 六二・一
 29 教科書にある 五・二
 30 NHKが使う 四・六
 外 五・七
- なお、その他、掲げた理由のほか次のような理由が記入された。前述の「外」がそれである。その内容は次のとおり。
- 1 新聞小説によく使われる。
 2 話しことばと文章語との区別をなくした。
 3 正常の変化か、訛った変化か。
 4 有理な形か、無理な形か。
 5 もっともな類推か、まちがった類推か。
 6 表記(かな・ローマ字)の際、形がはつきり出てくるか、どうか。
 7 語形が安定しているか、どうか。
 8 意義質の場合短かすぎないか、どうか。
 9 表現としての安定度が高いか、低いか。
- 採る形と使う形との一致率

具体的な問題語の一つ一つについては省略する。ただ次のことが注目された。すなわちアクセントにおいては、たとえばA・B両形が問題とされる場合、ある人は「一般的で語感がよい」としてA形を採り、他の人は全く同一の理由でB形を採ることが多い。アクセントにおける「一般的」ということは、客観性に乏しいようである。

また、実際にその人の使用している形と採る形とはかなり一致する。次のようである。

第一回調査 第二回調査

アクセント	八三%	八六%
音声	八六	八六
語法	八九	九一
全体	八六	八七

アクセントの一致率が比較的低い。しかし年齢別・地域別にみると次のようになる。

第二回調査

30歳	31	50歳	51	70歳	71歳
八二%	八三	九一	九二		
山手周辺	下町	東部	西部	九州	他
九一%	九〇	八六	八五	七一	七七

すなわち、年齢の高いものほど、また東京地域の人的一致率は高い。

V 話し言葉の文型

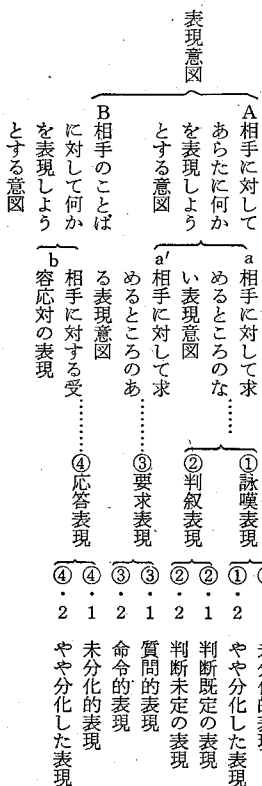
昭和31年度から昭和34年度にかけて対話資料によって行なった文型の研究は、昭和35年『話しことばの文型(一)』(国研報告書18)として刊行された。引き続き昭和35年度から昭和37年度にかけて独話資料により研究を行ない、その結果は昭和38年『話しことばの文型(2)』(国研報告書23)として刊行された。この二つの報告書の内容を中心に、話し言葉の文型の研究について紹介しよう。

既述のように、この研究は話し言葉の文法研究の一環として行なわれたものであり、話し言葉の構造を解明するためのものであった。思うに、文型の研究は文法研究の料であり、高度の文法研究の成果を踏まえて行なわれるべきものである。当時の文法研究の水準では時機尚早の感があった。解決しておかなければならない多くの問題があった。イント

ネーションの研究はまだ十分に進んではいない。また、主題と主格の取り扱い、語順、述語(用言)の格支配、副詞の修飾性、等々多くの事が不分明なままに残されていた。それにもかかわらず、文型研究を行なったのは、この研究を通して話し言葉の構造上の特徴がかなり明らかになるだろうと考えたからである。

表現意図、構文、イントネーションの三つの面から研究を進め、対話資料として約二十九時間分、独話資料としては約九時間半の録音資料を文字化して使用した。しかし、共通資料としたのはそのうちの一部分だけであった。

表現意図による文の分類は従来も行なわれ



ていたが、十分とは言えなかった。しかし、平叙文、感歎文、命令文等の文の種類により構文にも違いがみられるので、この面からの研究も重要である。

調査と考察を進めて、結局、次のように分類した。

構文は、文の成分をどれだけ認めるかが問題になろう。また、構文の型の種類をどのように認めるかが問題となる。

文の成分は一次の成分だけに注目して分析を進めることにし、はじめは、主語・述語・体言的連用修飾語(〜ヲ・〜ニ・〜ト等の格助詞を重視する)・副詞的連用修飾語・孤立語の五成分を認めたが、後に次のように改めた。

右の表にみられるように、個人により表現意図に即した上昇調イントネーションや、卓立の高調イントネーションをよく用いる人とそうでない人がいる。女性には発言時間の割には比較的によく現われると言えるが、男性にも多く現われる人がある。

対話資料から得られた各表現の文の典型は次のようになる。

- 1 詠嘆表現の典型
① 未分化な表現 〈感動詞の〉独立語
② やや分化した表現 (主語へ) — (連用修飾語) — 〈形容(動)詞の〉述語
- 2 判断表現の典型
① 判断既定の表現 (主語ガ・ハ) — (連用修飾語) — 述語
② 判断未定の表現 (主語ガ・ハ) — (連用修飾語) — 述語カ・カナ・カンナ
- 3 要求表現の典型
① 確認要求の表現 (主語ガ・ハ) — (連用修飾語) — 述語ネ・ナ・ダロウ・デシヨウ・ジャナイ(ノ・カ)
② 判定要求の表現 (主語ガ・ハ) — (連用修飾語) — 述語(カ)
③ 選択要求の表現 (主語へ) — (連用修飾語) — 〈判定要求の形式の〉述語 —

(独立語) — (連用修飾語) — 〈判定要求の形式の〉述語

④ 説明要求の表現 (主語へ) — (連用修飾語) — 〈不定詞を含む〉述語カ

(主語へ) — (連用修飾語) — 〈不定詞を含む〉連用修飾語 — 述語カ

⑤ 消極的行為要求の表現 (主語ガ・ハ) 積極的行為要求の表現 — (連用修飾語) — 〈すすめ・希求・依頼・命令などを表わす形式の〉述語

⑥ 応答表現の典型
① 未分化的な表現 〈応答詞の〉独立語
② やや分化した表現 (主語へ) — (連用修飾語) — 〈応答を表わす形の〉述語

⑦ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

⑧ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

⑨ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

⑩ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

⑪ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

⑫ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

⑬ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

⑭ 不定詞を含む主語ガ — (連用修飾語) — 述語カ

あとがき

話し言葉の構造は、上記の調査研究等によって、ある程度あきらかになってきたが、未解決の基礎的問題が多くある。

第一に、シンタクスの研究が不十分である。用言の格支配、主題と主格、副詞的修飾語の分類、句の分類等をはじめ、まだ研究の進んでいない分野が多い。

第二に、話し言葉と書き言葉の関係についても問題がある。日本では両者の間にもかなりの差がある。もっと書き言葉を話し言葉に近づけることが必要であろうし、同時に話し言葉を書き言葉に近づけることも必要であろう。

第三に、現在話し言葉はどのように社会に機能しているのかも十分には明らかではない。高年齢と青年層との間にはどれほどの違いがあるのであるか。あるいは、性別、学歴別、職業別等により、どれほどの違いがあるのであるか。

その他、地域社会、共同体社会等との関係あるいはマスメディア・コミュニケーションとの関係、個人による違い等、多くの問題が残っているのである。

(飯豊毅一)